



1278  
11



1278  
11

曲亭馬琴著

# 朝夷巡島記第三編

歌川豐廣画 大倉堂發兌



朝夷巡島記第三集叙



稗官小説。述作之巧。虛實紛紜。使無如有菜  
 唐自恣。寔無端倪也。余少游戲翰墨。世人悞  
 認。以為新奇。書肆懇請亦隨。至於觀變化  
 於流俗之際。而弄筆費紙。寫其風韻情致。以  
 老於閭巷。蓋以此不睡不食。苦心於案上。又  
 以此釣名微利。以畜數口者。有年矣。其所為  
 豈足取笑於大方哉。質弱多病。素不勝擔薪  
 儉食之民。不得已而爾也。雖然。漢藝文志。有



稗官錄閭里瑣言云爾。自是以降。街談巷說。雖史官有取焉。風俗僥醜。好奇走新。至於今。和漢新研之書。什而小說居八九。坊賈捷利者。由時好以揣刺也。昔人謂藥八百八味。而能毒相半矣。是言亦可以譬於野史稗說。其談詭譎。雖則有誣世之害。又不為無醒蒙昧之功也。其勸懲主治也。詭詞猶藥毒也。自非醫愚俗之神者。豈可得擇採以施於人耶。昔嘗有其人。姬周老莊。印度釋氏。是已。世代迥

降至元明之際。施羅兩才子出。竊因循道釋之善巧。盛建赤幟於傳奇中。後之稗官者。流剽竊摹擬。習而不及焉。猥褻呈媚。而勸懲彌遠矣。所云若僧尼孽海。金瓶梅。隋史遺文。肉蒲團。諸書。宜淫導慾。莫甚於此。又不可使聞於婦幼。頃朝夷巡島記第三集。藁方成。書肆文金堂請嗣梓。因述此事。代序以自警焉。文政改元立炆前。一日。題于飯。顯山前。菰洲北畔。著作堂。 蓑笠漁隱



朝夷巡鳴記全傳中輯第三編總目錄

第廿一條

待霄小姐蜘蛛

誓言的垂柳絲

第廿二條

賽俳優名簿

月下翁赤繩

第廿三條

引友小松宿

吻途轍江船

第廿四條

山院古塔婆

駒形老淫婦

第廿五條

色鬼孀婦鳥

欲海和尚魚

第廿六條

山神洞夜雨

信夫館隱篋

第廿七條

鸞鳳日蔭花

副將晦之月

第廿八條

平泉役敗北

假賢相赦書

第廿九條

夷使沐猴弁

衆兵大夢覺

第三十條

嵐庭連理木

遇春羽生梅

此編第二十一條以下為中輯二十條以上為初輯其總目見初編及第二編卷端繡像之右

馬粮標吉郎



賽玄

煎鍋の尻もあつれつ  
 くまろくひはまき  
 との  
 峯上よあゝ夜の鹿

黒萩

文字揚

人あつ  
 びいよ  
 あまの  
 すらの  
 まはる  
 あり  
 を

雀姫



修羅五郎

小惡勿作况大  
惡乎  
天口兌黙使  
人言



城戶三郎守詮

矢塚達六

推了車子  
過河提了  
油瓶買酒  
錯只錯在  
自家難向  
他人角中

足利左馬  
源義兼



蘇塗  
鶉東二  
異道

水上浮 萍隨 浪去 何分 南北 與東西



鳴江

婿竹

月夜三巻一



水草十郎昌甫



神井鬼六猛虎

信夫 新鷹の 風よ かくれ あり

信夫 信夫 信夫 信夫

蟬貫九郎



草三巻一

列傳姓氏畧目

初編起元曆元年正月  
第編迄建仁三年二月

**全傳** 朝夷三郎平朝臣義秀

**將相** 將軍源賴朝

**將種** 源範賴

六條藏人仲家

**武臣** 和田義盛

北條義時 大江廣元

稲毛三郎重成

狩野公祐茂

刀野備杖照時

**家臣** 江籠口廣通

將軍源賴家

駿河前司廣綱

吉見討者義邦

足立盛長

相摸太郎泰時

結城七郎朝光

宇佐美三郎茂光

信夫莊司元晴

大夫属重能

源義仲

足利左馬次義兼

北條時政

内田三郎季吉

海野太郎幸氏

岡田冠者親義

多賀藏人光仲

橋太左衛門尉高保



朝夷巡嶋記全傳第三編卷之一

東都

曲亭主人編輯

待宵の小姐蜘蛛

誓的乃垂柳絲

中輯第廿一

却説媼子并平八雷上勅の各り兵羽透羽の箭を合をえて且見姫の  
 寝所のあかふらち衛をてを後夜の夜まれば短くて丑三つあまりに  
 ける時卯月十日あまの甲夜より卯月魂の傾く教へんえ子ども初社能  
 音はる南の應れ珠の麻隙漏る涙かよ蟬燭を照りてきて糸採掛  
 蟾子の宿ともんえてみちひらき長所のかよ姫之感れもいぬと  
 り声間近くゆえんふ并平の今こそと念ふる大あまは格へて法書言向く  
 らら鳴じ古実の従の意目の松形のどくに執行ひつ二世の浮沈にあり





あへど刀の鞘も子を懸の人の并平膝で推禁めあは尚物事狂ひぬらむと  
 差別り或は思念の外とひひん又好むりの世言の世よ好むらむと  
 事おの付たりとそれとも切つる縁あはれ情ひもせん君の正しく  
 源氏の上獨廣徳朝臣のおん女兒梶門貴族の御仲るあはせぬべし  
 のが匹夫は惑ひて國隙を積り牆を踰りぬやそれとえん一のまはだ  
 け又親の為もものゆゑを恥辱せぬ某城は不可も義の為ゆゑ  
 命を惜む仇ある恋は連係せられて傳頸割らぬの亡後でも怨るべ  
 并平不便と心むらさく放還させぬへのよとひ殺父と許と彈と諭  
 てもいひあらへてもはむらう候は濡る朝も母を掛るまに身を倚て按  
 とかえんと狂ひぬらば并平殆りてあは墓目のらも命を引つ掖れつ

争ふお外面は窺ひ人あり紙門と現とひらそそ奸婦淫婦を傳めよ  
 と烈の声を并平の吐嗟ととなりえとまはりの行ち廣綱朝臣  
 長袴の裾蹴りて背は直躬と立ちぬ左右は西老臣間中隼人守直  
 下河邊小郎高吉紙燭を兼て隨へり且見姫の父君の声音の素より  
 ありつひ紙門は迷ひぬらぬや面あやと衣もぬぬ引被るは沈  
 け泣ぬら并平の暗かぬおのが燈を起るなや愧て頭を擡得られ廣綱  
 怒るる言を激しやをん并平汝の既骨相書をのて素も多罪人の如  
 吾祖母の尼憐とて墨染の袖りて掩ひトび去てぬらぬらぬらぬ  
 からぬおん慈愛の再生の恩値遇の福ぞの方とあは身を偶せと畏ら  
 るる何やや且見姫は懸相して奥より潜ひ入り膳アは家の重器  
 雷上勤のら兵羽水羽の前を盗りて姫を伴ひとまらんとまらつらるる  
 親狗よ

母を啗るとり世の常言のいふものなり人憎むともある母悪く飽ぬ嗚呼の  
 白物もねと罵るもの并平徳は頭を擧録由を和召されん疑ひの  
 るとあるれども匹夫も亦志氣あり奸夫盜賊といひ且えいふよる恥辱千  
 いがやへまじりしもの成や釋ゆらん曩の某身の暇を多う加賀乃  
 小松よ赴きく吉見冠者を索かともやみか廻駈して竟は得遭はぬ  
 其れも被刃中も骨相書を掛けて穿鑿嚴重ありけしむ聖安時の  
 露命を奪入為し藍玉院に立かへ再び尼公の見まよ入りむ暮目の  
 仰るるに姫への物の怪を禳えんとすの所りおらぬ教女上野の五十保の  
 温泉は浴せんとして赴きぬのり家臣達も殿は扈從し或は遠江へ赴き  
 果敢とて死のりゆすは汝を頼むと代交る所仰をきく固辞をりし  
 かどる存懇と請ふもつ終つ固辞あはせて御道守者も憐れし甲夜より

あつちの世も能もく徳もる死の乃るべし事ありあは頼政卿  
 への御相傳や函と傳聞く雷上動兵羽透羽の弓箭を備へて  
 物の怪の鎮じとてひはけむに君は且くを受ゆひとん疑ひを釋んと  
 ろるべつに尼公は回せり分明はゆるといふもあはど廣徳の呵と冷笑ひ  
 そは汝亦が尼君は欺きたるあぞやんぞんこれの五十保は湯治とて  
 十日あまりの日をかほし奴隷やうた見女地草苗をさせんが病  
 りとみく俄頃かへる今宵亦間中隼人守直も遠江より飯著せり  
 去るは宿所の為伴やうるはる事のもあれは竊ぶ窺ふ直目が臥房に  
 密夫を捕ても世の面ある親の恥辱はうは愉しとせむしはの廣徳  
 ろるんちの教とて奴をうらなねと栄は得失の思を離して羽生の宿を  
 世と避るる今更刃はぬらんとの亦是とらるは愉うたかれば汝に

向へさ事あつ。あるまふと。ひびく。書院のから出の。同中  
 下河辺の両光堂の并平が。同中。書を合ひ。犯人を推し  
 まつて。おん前より幸居。當下廣徳。弓矢を。又昔平に  
 うち對ひ。汝且見。物の怪を。穰ん為。この弓矢を。尼公は借利せ。ふ  
 その。実ある。相傳の縁故。弓矢の名目神あ。ふ。ありての  
 所為。あ。ふ。弓矢を借。る。要。竹の故。雷上動。兵羽水羽と  
 名。疾。人。膝を進。め。諸。并平の畏。袖。合。せ  
 弓矢の類。政卿。紫宸殿の。怪。射。ひ。昔。諸。を  
 うら掉。い。傷。あ。ん。こ。い。所。悉。皆。虚。言。し

いとぬる。歎。と。謹。高吉守直左。倭。謙。退。辞。謙。由。文。あ。て。ふ。  
 才を惜。せ。か。と。ま。外。外。同。せ。の。あ。め。答。は。ぬ  
 り。と。論。せ。并平。沈。吟。小人。罪。を。王。を。抱。を。罪。あ。つ。と。僕。が  
 事。あ。ぶ。お。か。ぬ。弓。矢。を。借。な。つ。ん。ご。お。疑。由。一。月。せ。  
 孰。は。勝。路。は。且。且。紙。を。笑。も。ん。某。謙。合。を。在。  
 と。弓。馬。の。師。匠。の。弓。矢。の。原。を。形。を。月。表。と。陰。又  
 箭。を。刺。ひ。く。彎。と。圓。や。て。陽。と。この。時。や。日。に。表。せ。陰。陽。と。よ  
 相。感。激。く。遣。る。弓。矢。の。功。猶。南。山。の。雷。の。雷。の。陰。陽。二。氣。の。違。は  
 弓。矢。の。徳。も。と。ま。あ。は。し。周。易。は。考。ま。雷。れ。よ。動。く。と。地。性。の  
 崩。牙。混。虫。の。出。づ。雷。水。解。の。二。月。の。卦。なり。解。の。散。る。釋。之。屈。する  
 の。こ。よ。伸。び。釋。した。もの。よ。解。の。時。懿。の。我。君子。の。こ。よ。て

進む。小人のさし立てて退く。怒も釋べく。鯨も亦滅ぶ。既已ふの徳あり。ざんぼのらの重孫と初陰二陽三陰四陽五陰六陰と卷二の雷水解の全々と表せてあざる。故よりてあり。鬼物を二氣の凝滞よ成さる。解よあざるが散滅さる。彼紫宸殿の怪鳥乃とた雷上動の武徳をも射て墮されの聲よ所みあり。これよりたけらる。縁故をもあざる。又水羽の征箭の鐫の目よあざりて適よ声よ。声あたるのの陰あり。兵羽の征箭の鐫は目あり。これと適よ声あり。声あたるのの陽あり。標の則箭のや声。欽水の每声乃。種あぶ。その兵羽と書透羽と書く。字義は拘るくもあざ。かればら陰陽あり。箭は亦陰陽両儀あり。陰陽亦文武の義。乱る。式をりて征治るとの文をもて化とらと並べて琴とを下。古聖の

所能也。人の弓矢の文武の徳を具足と。唯武器とのこと。この文備あり。この武備あり。頼政卿の良将あり。その弓矢を傳く。小殿を尺對しての汝跡が世尊は法同と。議あり。人欲省は宅は嗚呼あり。志る。小俗流は不審あり。その弓矢の由來と。織つけたる然んゆひ。その書は云。汝は々々名を。ゆる矢あり。水羽兵羽雷上動と名つけ。此の養由基が所持の物。彼養由基楚國の人。秦王の時。當りて。西文珠の化身。一日文珠著。羅羅由者あり。これ故に二徳を教んと。件の弓矢を授む。この養由基を。弓を取ると。の鳴雁。忽列と乱し。飛を。弦は。應りて。墮り。養由基は七百歳の齡を歴て。天下を見察とる。唐山あり。その弓矢を傳んと。そのの。よりて。且く。その女兒の。椒花女は。授む。馳て。そのの。成く







月三十一日

柳井外子



草子二巻一

十五

弓の初入り。雷上動の名ありたむらび。祖又三位入道雷水解乃  
 卦又本つた。この弓と造る。一は弓人のそれを規模し。その  
 藤と唱え。うんちゅうの頼政と。あれも子孫として。その祖の諱を  
 物と唱へ。いと憚あそ。あれが先考仲細朝臣彼弓人ホよ。この  
 示。雷水解の諷より。雷上動と唱び。えたまひさ。れ改爲と  
 雷上動と。同音ゆ。その諷は稱へ。別は子細あり。と解諱  
 のふら。井平の身も係。外は忘。感嘆。膝の進。次。ざり  
 たり。廣綱か。弓と。改の弓。名目古実と。考。ゆ。これ  
 りて物の怪と。讓ん。おひつ。墓目の事。の。と。同。ま。ん  
 慚愧。堪。墓目の法。その家。小口。傳あり。某。亦。平。師傳  
 受て。も。真。法。あり。や。虚。実。の。存。せ。夏。の。基。本。を。

弓の初入り。雷上動の名ありたむらび。祖又三位入道雷水解乃  
 卦又本つた。この弓と造る。一は弓人のそれを規模し。その  
 藤と唱え。うんちゅうの頼政と。あれも子孫として。その祖の諱を  
 物と唱へ。いと憚あそ。あれが先考仲細朝臣彼弓人ホよ。この  
 示。雷水解の諷より。雷上動と唱び。えたまひさ。れ改爲と  
 雷上動と。同音ゆ。その諷は稱へ。別は子細あり。と解諱  
 のふら。井平の身も係。外は忘。感嘆。膝の進。次。ざり  
 たり。廣綱か。弓と。改の弓。名目古実と。考。ゆ。これ  
 りて物の怪と。讓ん。おひつ。墓目の事。の。と。同。ま。ん  
 慚愧。堪。墓目の法。その家。小口。傳あり。某。亦。平。師傳  
 受て。も。真。法。あり。や。虚。実。の。存。せ。夏。の。基。本。を。

といひの廣徳うち領き既にはが方ありと。その學問の武となり。いまだ  
 その技をえんむ。故この弓箭せめて。うら指を的と射て當り。後奪の外  
 りとせん。又その的を射外ふ。汝がうら標とて。後奪の飛免。かじ。  
 天の明らうと。おわやうぞ。さくくといひ。さびき。もづら。ら。箭と連と  
 ろの。高吉守直ころ。ほく。障子と開つ。縁願ある。兩戸。後。うら。標  
 ひ。け。庭の。時と。出る。もの。声も。漸と。数。や。て。天の。志。ら。く。と。昭。ふ  
 り。并平の。辞。と。た。れ。う。ま。く。弓。箭。を。受。て。檐。下。ふ。出。か。何。の。所。業。願  
 い。と。お。ぼ。つ。つ。あ。れ。所。ゆ。め。も。お。の。が。一。箭。の。的。否。を。り。て。お。ん。疑。ひ。を  
 釋。ま。ん。願。か。さ。き。僥。倖。あり。何。と。ぞ。ね。と。仰。上。す。廣。徳。も。湯。近。う。  
 立。出。て。梢。と。瞻。仰。并。平。彼。如。の。柳。を。え。ん。む。ひ。く。楚。の。養。由。申。奏。  
 百。歩。の。外。不。柳。葉。と。穿。と。い。ひ。傳。ふ。が。朝。戸。田。盾。人。の。織。の。盾。十。枚。

わ。り。推。累。ひ。て。射。徹。し。う。皆。を。射。藝。の。神。あり。の。こ。それ。後。ま。を  
 至。下。ご。とも。吾。指。と。的。の。彼。如。あり。彼。柳。の。梢。ふ。こ。を。北。向。つ。衆。校。を  
 離。して。鐵。く。垂。ら。弱。條。あり。こ。ま。氣。幹。より。一。尺。残。り。て。只。一。箭。を。射。て  
 落。せ。よ。ま。ま。ん。あ。の。汝。が。う。ら。標。は。う。ら。行。ひ。は。い。ふ。潔。白。の。人。と  
 ち。の。ん。う。せ。よ。か。と。扇。を。り。て。遙。く。抄。を。示。し。ま。井。平。の。當。惑。の。改。を  
 重。要。時。傾。け。が。さ。い。切。て。親。を。改。め。及。び。ぬ。り。と。さ。う。る。あ。が。推。辭。不。義。の  
 奴。と。せ。ら。る。進。退。究。ア。ゆ。ひ。ぬ。只。成。敗。を。天。に。任。す。運。を。試。し。ゆ。ん。天。覺。  
 あり。と。一。禮。して。不。や。弓。よ。希。と。う。ら。刺。へ。下。河。を。高。吉。の。間。中。年。と  
 目。を。注。せ。井。平。口。を。方。あり。とも。七。十。歩。の。さ。る。こ。う。系。多。く。柳。の  
 條。を。射。ん。と。む。の。こ。ま。暗。技。の。叶。り。ぬ。とも。あ。何。哉。遍。も。辭。し。や。せ  
 う。と。さ。氣。文。の。是。彼。面。不。顯。きて。さ。ろ。の。中。に。陪。と。ら。る。ま。ら。ん。井。平。の。

左右のくハ弯由獲まん本貫信儀の祓坊の神社故郷道江乃  
 多賀の神を公中は祈清し且く用ふる月をひらけ竹さぬふきを  
 及して弓と満月の如く弯圓め矢声とうけて丁と射る寃違ひは妙多  
 柳の小條を二尺強く弾帯と射切らう條の上より閃き比の邊平  
 高吉守直  
 こととんぐ。さへごも声とうけ射らうくとりう共ふ桐と披こく  
 立かる。髪の後毛糸系うまで。あふご立まが井平のら狭く小條を  
 突立あふの氣を何ひたり。廣細感嘆續かだ。舊の如く退き  
 媪子。と召まへ。井平の何と恋つ。且假山の母よりふりぬれて。箭を  
 抜こらふ柳の小條とより添て進らさん。下河辺高吉の恭一く  
 受取て車茶ふきと納め。間中隼人の柳の條を。廣徳よんせなあり。

主役頼小井平が射藝を譽て己ざうたり。かくて廣徳の井平をむら  
 近く振れよせ。これ初より汝ぞりて。一番量ありのといふん。志うんた  
 ふた人と結るこへ。竟舞もあるこれを病り。いと亦其舞は疑ひあり。  
 をどめ時政は休らる。又下野あての為作らる。かたはやくとて。素り  
 その罪ふあらば。さうとて。も力ありの。口あて。ひるれ。吉今よ  
 多うり。辨俊や。牙の非と飾。奸曲あて。賢者を誣斯のどれも  
 亦まう。まう。北條刀野ホが行ふところと。悉非とまう。やう唯  
 汝が。命を。悉と。一が。じ。うて。虚実を。弑ん。と。ひ。は。れ。と。ひ。と。の。  
 吉見冠者が跡を慕ひて。加北へ赴くと。ひ。は。黙。止。う。り。又。う。り。さ。る。  
 正あ。く。如此。く。小。謀。り。の。と。藍。玉。院。小。示。り。ま。し。て。あ。う。り。候。ハ  
 果して。ま。う。さん。墓。目。小。假。托。て。且。見。が。色。小。羨。し。せ。ん。兵。家。は。所。云

乞權あり。されば六韜の選將を篇ふりしや。こと小言を以てりてその  
 辞と観よ。ことと窮る小辞を以てりてその変と観よ。これと與つるよ。  
 間諜以その戒と観よ。明白頭向りて。りてその徳と観よ。そのことを  
 使ふ財と観よ。りて。以その廉と観よ。ことを試る小色とりてりて。み  
 その貞と観よ。ことと考る小難とりてりて。みその勇と観よ。これを  
 研るる酒とりてりて。その態と観よ。この八徴備つるとは賢不肖  
 別るといふ。因て廣徳を竊小謀りて。はふ鳥帽子装束させ。家平  
 侍つら。若くは卒尔小備よ。りて。騎るや否と観ん為。これを  
 誘ふよ。且見姫か色とりて。動せり。その貞死や否と観んた。これハ  
 五十保よ。湯治しつ。先堂もみふ。な。と。い。せ。の。間。諜。を。り。と。戒。を  
 観ん為。ら。若くは。の。り。実。墓。目。の。射。法。彼。と。り。此。と。り。詰。り。同。の。

明白頭向りて。その徳と観ん為あり。八徴の中四徴を行ひ竊よ  
 其辞を弋よ。義服小愛と重器とめて。誘ふ色と観ると其のどく。  
 巧言艶語は動えん。廣徳が同率。毎小徳言の物小應と如く。  
 辨舌泉の流るに似たり。加以百歩を隔て。柳の絲を射て断る。  
 是れ小考る小難とりて。以その勇と観ん。不足する。今こそ疑心  
 氷解とされ。和郎の寔小落令の人追捕。嚴密なりといふとも。その  
 罪とあらざりけり。然るにひり。廣徳が執念深も疑ひて。賢者を  
 陷る。や。で。欺。詐。の。子。を。彈。世。ハ。事。を。好。む。小。似。れ。ん。が。も。只。その。才。と  
 愛るのあまうり。捨る。死。ひ。あり。惡意りて。せ。り。あ。ね。と。廣。徳。も。苦  
 志。ハ。余。が。僻。事。と。あり。けり。と。心。限。り。勸。解。多。ハ。井。平。ハ。廣。徳。の。ま。を  
 愛。の。小。戒。の。感。候。を。禁。め。あ。ら。ざ。い。ふ。ハ。人。の。言。葉。も。士。ハ。已。と。抄。致

あつた。女は己を哀れむる。為小貌るといへり。其ハ猪場の雑子。こゝろは慈恩ふるの再生なり。何ぞりて報をもん宿世の中死値過る。邪いと致しくこそといふ誠ハ辞小あつた。當下同中下河辺の老堂ハ又更めて并卒に對面。送小名氏を告留して。久後やぞと突たり。或待乾まが廣徳ハ復并卒を呼び近づけ。既ふかう打釋て色ミ果べたるのみぬ。且見姫を再び見せし見と。召さへ阿と応てり。ありの衣裳ハ宵のまに。ては姫ハ小異もねも。既ハ月額刺さ。いとさびさる。男子ハ小樓撥取り妍さ出て。兩老堂ハ次さる。彼ハいつ中と問ひつ。きんかう。足ても并卒ハいまどうろとひげし。さもこそわめ。と主従ハ笑と面ぞあつる。

中輯第廿二

賽能優の名簿

月下翁の赤繩

そが中ハ廣狹ハ笑をいささく。彼男子を并卒ハ指し示。媼子ハ涙を認まら。彼奴が假名ハ且見姫真ハ海老尾加世丸と叫ま。童飛ら召使ふ。賢か。ねど偽らば。才あけ。さも愚も。あつた。猿樂とぞ。あ嗚呼のりの。嚮あも説諦せ。竊小其許を試つる。婢女們をりて。まといふとも。真の吾女兒して。其許を臥房ハ誘して。こまは淫奔を海さ。男女の親疎ハ憑じ。情は由て心動ふ。詭の計も。遂は真の密會とあん。まの可惜社伎を陥る。の罪。いれあり。の。其許をも。陥。且見姫。この。奴の。で。謀。か。う。も。ね。と。左。往。右。来。と。ひ。つ。と。加。世。丸。ハ。如。此。こ。こ。謀。を。説。示。婢。女。們。あ。も。こ。う。ろ。ひ。さ。せ。と。彼。奴。ハ。且。見。が。衣。裳。を。被。せ。被。衣。小。面。を。う。ち。掩。せ。と。燈。燭。暗。き。臥。房。小。を。さ。せ。う。ら。あ。く。其。許。を。挽。め。さ。せ。と。密。語。を。い。は。せ。と。け。う。の。あ。つ。ぬ。り。の。こ。と。その。肺。肝。を。



信天翁



ちんこのやふみのとつるゆん玉  
太田の里乃 秋のふれ月 信天翁

加世丸



若ぬへ井平更不驚れんて。氣色合ふる額を按ゆ。すまぬるを。用ひらけら自他の幸ひ感謝不堪どいといへ。加世九進と出家人。昨夕の古たのきとの隈もこれ主命いと憚まひひ。室ふ兵の荒の。みら奥安積の沼生る。浦榎ふぬ且見姫且見て恋のさめぬ。け見糸の牽出物あ。物休あくも姫うへの名をいつのりし淫婦が。首取ていと長た袂不隠し。假髪かみの髻結搔か廻まといご実檢と。ささ出せ六井平の堪うね。笑の中あはれ小挨拶と廣保もあどそ。加世九よ。汝な癖飲今いまの様樂せほあれ。媪子ころふかけられ。彼かれの口くち遁世せ。次の冬建文二年十月夏の情とあせそ。鎌倉へ遣せられ。あまじき。二十七日小端あく幕府まくらふ不咫尺と通使とよくあそ。賢愚けんぐのく差さあれども人を使ふは必方あり。彼かれたざる人ひとのほとあかひりやと問うべ。

井平ふく感佩。敗鼓の章をも貯る。便名医の用心あり。二年も。よく親おやの亦良將の用心ありんと稱さう。せが加世九の愧て頻しばしば不巡めぐ。當下高吉守直たかきちうじくの齋一主君いしゅきみよあう。昨夜より此彼と心を用ひ。せも。は。その疲勞のひけめ。媪子おなごも早飯あさひいを勧めひをやといふ廣保。ゆてうら哀あはれ周公且の聖せいあるも哺ほと吐はきて客と迎へ髪と握にぎてしまわれ。況いは廣保ひろたけこの人を得えたり。何なんぶ疲勞つかれをおおべき。但ただ一圓居いちげん入い真ましく。饗きやう應おうと欠かふ似にう。早飯あさひいを勧めよと婢女こひめ們らは傳つたへし。これもおあく。相飯あひいせん汝達なんぢらの羅ら出いて休息きよくせよと仰おほせま。高吉守直たかきちうじく加世九かせくの唯ただや。とて退まひる。厨くしやの中なか豫よてう。准備じゆんびしてけ。は。女おんな重おもむ。椽せん盤ばん温湯ぬるまゆ。汲ひり入いりて賓主ひんしゆよ養齒やうしと勸すすむ。彼かれ婢女こひめ們らのあく。膳ぜんとりて來きる居ゐ。ころ。井平せいへいあく。辞讓じじやう。欠か席せき未まふせり。御食膳ごじきぜん既すで果はる。婢女こひめ們らの。



退き之四下小人のせむばりぬ廣縁の折こそけしと又并子と扱  
 よも鶴太とのいとまを同へさるの取同らぬ其并が豫念の執権  
 仕ら及下野ある足利へ追遣されて刀野時夏が家僕ふせれを又  
 信友の為小罪人とありしとの藍玉院のおん物指小使くせり  
 去るれもその親の雅といふて死なばその進止せえて推せ野人  
 西夫の子めわびせ世々の憚る事ありともこれの隠さるぐもあは  
 名若の人と正首ふ問はる并平亮本とら美このり問せぬは  
 折もあはるやよんと豫てのさひひさ敷あるねども某が父の樋口兼光  
 木曾殿討ちのひに兼光も亦誅するこの時某僅小四歳乳母が親  
 養食して十年あまり近江小送り時政め小邂逅して彼人小仕  
 始せりが如此さあり終せりが箇様とと媪子と名若一縁故ま

時政小仕と豫かたはるひる時夏が隠匿さる潜す小演説さんく  
 りや其えり足利を愛顧せれ吉見冠者ハ蒲殿のおん子  
 又朝夷三郎義秀といひ猛者ハ則朝給小産する和田殿の三男あり  
 こ且も亦故ありて幼推とた父小弁られ乳母が里小人とあれも將帥の  
 器量あり実文武の英才あり去るれ小某幸小友垣結ぶと依て送不  
 素姓を告されども朝夷何と某といふも親族の救びを竭さん  
 送ふひがた親のさふればあり殿の故ま士を愛し厄を救ふの仁心  
 かり彼二方も罪あじて今厄難の中ふありその往方と定るるて人の  
 圓居小録あるの送憾くといひくけて嘆息を廣徳もはくとて頼よ  
 嗟嘆しその人を知らんとあは且その友をよといふ古人の格言果せるか  
 これのま吉見朝夷を去るれども其并とて彼人をも亦佳傑とんと

まゆりの現掘口と今井と鞠繪と兄才とまんが其汗ハ朝夷が母不属ての  
従才あるふそれを送不告ざりハ卒介不猜しと兼光ハ木曾不後まで  
降人となりて誅せられ鞠繪ハ和田系盛不再醜せり。かれハ武勇勇夫  
為少ハ親あがも愧ざらんや。従才といハぬハの故多し。まづれも兼光も  
鞠繪も當時武勇小名高し。難不賤て阿容とと命を惜むハの末あじ。  
鞠繪がころハあつとあけ且と兼光が降系ハ清水冠者が為不せし飲  
まろバ蜀漢の姜伯約が孤忠はととどかた。兼光討まて高野入間川  
あて害せらる。まも亦天あり命を傳す。堀口次郎中原兼光ハ権頭  
兼遠が子とり。兼遠ハ信濃の豪家世不たれる武士あり。木曾が  
兵を祀せも兼遠又子が羽翼不たけ。和殿ハ則兼遠が孫兼光が  
子といふ。は凡眼もるるとあり。と憑た壯まらる。就て又一深あり。女兒

且見が事ありし。年ややく園とれも故あり。いまも婚縁とて結ば  
嚮つられ。和殿を弑つるとた小真の且見不逢せねも。その名ハ不ぞ知ふと  
なり。まも亦天縁あり。頼次和殿小女兒を妻せ。欺詐らせらる。密山落と  
信言とあると。とあハのいふ。とて井平顔殺す。額の汗を推拭ひ。  
こんあひくけもあれ。仰せ兼りゆりのね。君ハ正く源家の嫡と世を憶。迹と  
埋めて。鄙の田舎小とり。ませども氏貴く位高き。某堀口が子といふも原  
是木曾の老黨ハ將帥とりて士率小混じ。夜光とりて泥中小擲んる。  
いと情がらや。加梅某ハ慈善の家小露命を殺す。今ハ形餘の浮流人  
あり。まも同輩の女兒ありとも。妻と娶る。まりの小あられ。戯れども  
夏あそり。物侍はし。と怨む。ハ隔亮。越不竊聞。ハ菅浦尼公。ハら  
咳まら。梭枝不紙門をひく。せと。徐不進。入り。ハ廣保。ハ忙。席を立て

扶掖并卒由こゝに返迎へて。柵の上居まゐりてんが。按枝のこのころを  
引て。紙門を礎と引て。そが内へ入る。當下尼公は。然  
并卒をさんかうん。やまの男子よ。この尼法師が。年々も愧と忻。しと  
さそねて。ろふ扱ひん。それ。和殿を廣徳より。おんせん為あり。唯  
佛の方便と。いひて許せし。和殿の樋口兼光が。一子でありし。滅且見が  
塔の。望まぬ人。は。襦袢の中より。膝小居守育する。曾孫。なれば。佳  
塔欲得と。豫て。より。おん。なる。ぬも。廣徳の。故ありて。下。い受領  
辞。せ。より。草。た。田舎。い。こ。と。い。人。も。い。且。見。も。亦。情。願。あり  
生涯。人。不。帰。せ。この。尼。が。あ。た。後。大。藍。玉。院。の。後。住。とも。な。せ。り。と。り。ま  
は。鏡。こ。も。亦。不。便。あり。より。故。あり。の。あり。も。尚。未。ころ。た。未。通。女子。を  
い。ろ。ろ。尼。お。せ。り。と。り。ま。と。り。ま。か。う。さ。る。お。い。不。樂。する。尼。が。こ。ろ。次。級。と。り。や。

廣徳の初より。和殿を去りて。試より。この人。と。と。母。ハ。こそ。親の口から  
白地。婚縁。こ。は。縁。なる。れ。さ。る。紙。の。母。推。辞。ま。え。ハ。人の。信。と。ま。ぬ。ぬ。お  
似。う。う。け。い。と。叮。嚀。小。湊。の。う。ハ。并。卒。ハ。席。を。避。て。頼。せ。り。教。も。ぬ  
承。を。せ。ふ。あり。良。か。ん。殿。あり。尼。君。之。塔。が。い。と。ま。で。思。ひ。お。ん。慈。愛。ハ  
須。弥。の。舟。低。く。大洋。も。深。か。る。下。あ。り。去。て。日。光。も。照。さ。ぬ。并。卒。が。生死  
う。ろ。と。う。ち。任。せ。な。れ。バ。何。ぞ。推。辞。な。ん。あ。る。れ。も。夫。婦。ハ。人の。大。倫。之  
その。儔。お。ん。だ。り。情。も。逼。る。不。縁。の。基。致。只。い。遍。も。の。り。お。い  
か。こ。せ。り。と。り。ま。と。り。ま。か。う。さ。る。お。い。信。も。あり。あ。る。れ。の。と。と。召。れ。ん。姫。上。の  
見。為。お。某。媒。妁。つ。ま。り。ん。その。塔。君。ハ。別人。あり。言。見。符。者。某。邦。に。く  
今。某。が。伶。傳。ふ。ま。り。只。彼。君。の。愛。顧。お。答。へ。忠。告。お。う。て。と。某。邦。に。く  
浦。殿。の。お。ん。子。あり。バ。素。より。貴。い。青年。こ。ふ。十八。歳。温。順。お。く。文武。よ

才あり。まゝも容止美麗中て井平が類ふわらんこそあれはに後迹  
のんこの君もふ。り某が羨ふうて。ふの婚縁を許さる。身の暇を  
あつて。まのびくふ在知をたづめん。この羨のいふ。と信ぢらて。いへば尼公ハ  
頭をうらふ。否その婚縁ハ望かば障るうふあり。且見が年紀を  
十八と嚮ふひひハ方便之實ハ今茲二十ふありぬ。和殿ハ一歳劣する歟。  
義邦十八歳ある。且見と年紀由相応かば。整ふこれひとり。  
廣徳既ハ世を避まら。浦毅の子を婿せむ。人の袂言むり。か。  
怒うた二つ。化を求るうら。と恨良ふて。ゆえの。理り。あれ。井平ハ  
困ト果て歎息と。廣徳ハこの氣及とて。や。媪子。この。か。辞ひそ。  
且見ハ。女見。て。実ハ。女見。ふ。渠ハ。六條藏人仲家。が。送。腹子  
あり。仲家ハ。帯刀先生義賢の嫡子。に。木曾義仲。が。為。父。兄。あり。

義賢ハ。悪源太夫。平。不。擊。ま。比。祖。又。頼政。卿。その。孤。を。憐。れ。く。  
養ひ。そ。て。猶。子。と。仲家。と。名。つ。け。め。か。か。て。夥。の。年。を。歴。て。流。承。  
四年。五月。廿。五。日。仲家。ハ。養。父。三。位。入。道。不。任。ひ。つ。宇。治。河。の。合。戦。ふ。その。子。  
藏人。太郎。と。共。比。類。る。に。働。き。て。父子。一。足。も。退。ら。ば。お。き。枕。を。討。て。  
この。と。仲家。の。妻。有。身。生。る。昔。浦。翁。不。具。一。ま。お。と。せ。て。伊。豆。國。へ。  
流。る。が。中。臨。月。ハ。産。む。産。る。に。氣。及。ゆ。て。三。年。と。い。毒。永。  
元年。夏。五月。又。仲家。が。亡。日。ふ。當。て。その。母。俄。頃。不。産。の。氣。は。死。て。産。後。世。ハ。  
女。の。子。と。赤。子。と。恙。多。り。ゆ。殊。ハ。難。産。あり。け。し。母。ハ。當。座。に。  
あ。り。つ。昔。浦。屋。公。の。い。ふ。その。孤。と。不。便。が。ら。せ。く。且。見。姫。と。  
名。つ。け。つ。側。を。去。せ。ば。乳。母。と。字。せ。り。後。ハ。廣。徳。又。女。の。子。を。け。れ。ば。  
そ。ま。り。て。養。ひ。そ。る。と。中。年。末。を。過。し。て。ま。り。且。見。が。腹。ふ。あり。と。



六條藏人侍家



伊豆の隠  
 宅の陰陽  
 師の執受  
 胎の児を  
 うらあみ

三年ありし怪しと居公の竊に陰陽師小台せのひよ。この子の成長の  
後家諱の妻ふあさん終焉の地決定るあはたと正しくのひをせられぬ。  
今更あまの仲家が才ありる木曾の殘黨并卒。和殿且見姫を。  
妻せんとて残るるの彼下進よ付合せり。亦奇あまを。と正者よ説示。  
あふあん菅原屋公の酸鼻を仲家あり。且見あり。実の子。実の孫。  
異あまごりた孝順を。ありへんまご世あまをもの老の寤寐ふまかす。  
あまかまの姫が幸あり。よん縁遠ま愧る致叔父の木曾亡し。  
形あまて居あまんとしひつる奴彼下進の事まよ明く地は説示。  
二十あまを嫁せむせだ。あま後一婿が子を并卒。和殿あまんと。  
神あまぬりの雅うまご。まご且見あま若ねども天縁あまは睦し。  
夫婦の愛も想像る。その子と家臣は養せその女兒とめて郎黨小。

妻あまの世ふ多う。うや和殿の北條ゆふ憎るるのありとも。刀野ふ  
追る人ありとも。孫会の將軍家小己を奪うる咎あまは浦殿の  
子の貴て上ふ忌む筋と異あり。廣徳が婿あま。このも憚ることあ  
侍と。追捕の沙汰の後まごも。下まび屋が法衣の袖りて。掩ひ  
人を出さんや。あまろはうてあま。とかりうく小禰一のあま并卒領ふ  
驚嘆。又兼光が教まご比某いままご東西を辨まごひひく。仲家  
朝臣の事まごの後あま笑るの。細くの糸まごひひく。今あ脱る  
路あま。仰ふ隨ひひん致まごりまご婚姻のいそまごせまごあま。  
あ陰ふよりて世間の廣くあま。あま。その時あまをまごあま。といふ  
廣徳推禁め。媪子。そのひひひ。公治長の篇を補まご。銀錢の  
中あ在といまご。その罪あま。その子とて妻せへん。和主人の私あま。

心既決せり。間中守直下河辺高吉木也。夏の氣巨細不若て  
 二人一人嫖妣をせ。近は吉日とべ。且その日也。益王院侍りて  
 藤寝の疲勞を治よ。あつるはとや。と期を推て結ひかけたる赤繩  
 出雲の神の所為あり。かくて屋公の堂を二つ。四つ。ちのまを  
 召近つけく。芥平湯を勧めさせ。又裏八表の物かゝりに時移て午の  
 貝くころあり。夕膳の居が奪て。あふせんを芥平を誘引立て  
 かへりぬ。

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之一終

芥平湯の  
 夕膳の居が奪て

